令和５年度「ギャンブル障害及びギャンブル関連問題実態調査」に関する報告書　速報

実態調査概略

独立行政法人国立病院機構　久里浜医療センター(2024年8月)

ギャンブル等依存症対策基本法（平成30年法律第74号）第23条に基づく実態調査として、令和５年度における**ギャンブル等依存が疑われる者の実態とギャンブル等依存症の関連問題の実態を明らかにすることを目的**として、「国民の娯楽と健康に関するアンケート：調査A」および「依存の問題で相談機関を利用された方へのアンケート：調査B」を実施。

①　国民の娯楽と健康に関するアンケート:（調査A）

○　目的…一般住民における「ギャンブル経験」や「ギャンブル行動」の実態、および「ギャンブル等依存が疑われる者の割合の推計」を明らかにすることを目的として実施。

○　調査方法

- ✓ 全国住民調査: 全国の市町村300地点に居住する満18歳以上75歳未満の日本国籍を有する者を対象として、層化二段階無作為抽出法※1を用いて18,000名を調査対象とし調査票を送付。
- ✓ 配布および回収時期は令和5年11月１日～令和6年１月31日。
  回答は郵送・インターネットのいずれかを選択するよう求めた。
- ✓ 回収数は9,291票（回収率51.6%）、うち**有効回答数は8,898票（49.4%）**。

※1 本研究における層化二段階無作為抽出法は全国の市町村を都道府県と都市規模によって分類し（層化），地区・都市規模別各層における推定母集団の大きさ（住民基本台帳に基づく令和年4年１月１日現在の18歳以上人口）により，18,000の標本数を比例配分するものである。

②依存の問題で相談機関を利用された方へのアンケート:（調査B）

○　目的…公的な相談機関の利用者を対象に、ギャンブル等依存の問題を抱えている当事者と家族の特徴やギャンブル関連問題の実態を把握することを目的として実施。

○　調査方法

- ✓ 全国の精神保健福祉センターならびに依存症に関する窓口を有する保健所を対象に調査依頼を行った。最終的に調査への協力が得られたのは精神保健福祉センター65か所と保健所54か所。
- ✓ **当事者票**と**家族票**の２種類の自記式アンケート調査（無記名）により実施。
- ✓ 配布および回収時期は令和5年9月1日～令和6年3月31日。
  回答は郵送・インターネットのいずれかを選択するよう求めた。
- ✓ 回収数は**当事者票が296票（有効回答288票）**、**家族票が387票（有効回答382票）**。

国民の娯楽と健康に関するアンケート：調査（A）主要な結果①

（1）　国民のギャンブル行動（有効回答数　：8,898票（49.4%）〔男性4,204名、女性4,694名〕）

○ 過去1年間のギャンブル経験：男性の44.9%（1,888名）、女性の26.5%（1,243人）
○ 過去1年間にギャンブルに使った金額（1か月あたり）：中央値　9,000円
○ 過去1年間に最もお金をつかったギャンブルの種類：宝くじが最多（53.3%）で、パチンコ（15.0%）が次に多い。

（2）　過去1年におけるギャンブル等依存が疑われる者（PGSI8点※1以上）の割合とそのギャンブル行動

○ PGSI8点以上（年齢調整※2後）【図表1】：全体1.7%（95%信頼区間※3 1.4～1.9%）、男性2.8%（同 2.3～3.3%）、女性0.5%（同 0.3～0.7%）。
○ 各年齢の有効回答数におけるPGSI8点以上の者の割合で最も高かったのは、40代が最も多く（2.4%）、次いで30代が多かった（2.1%）であった。【図表3】
○ 過去1年間にギャンブルに使った金額（1か月あたり）：中央値　6万円
○ 過去1年間に最もお金を使ったギャンブルの種類は、男性ではパチンコ（43.4%）、パチスロ（24.5%）、競馬（11.3%）の順で、女性ではパチンコ（60.9%）、パチスロ（17.4%）、その他※4（13.0%）の順で割合が高い。【図表2】

（3）　他の精神疾患や自殺などの関連問題

○ K6（うつ、不安のスクリーニングテスト）で比較したところ、ギャンブル等依存が疑われる者（PGSI8点以上）は、8点未満の者より有意に抑うつ・不安が強かった。また、これまでの自殺念慮（自殺したいと考えたこと）の経験割合等についても、PGSI8点以上の者で高かった。

（4）インターネットを使ったギャンブルの現状

○ インターネットを使ったギャンブルの購入方法については、すべての公営競技などにおいて、「主にオンライン」または「両方」で行うと回答した者の割合が過半数を占めた。【図表4】

（5）コロナ拡大前とのインターネット利用したギャンブル行動の変化

○ 新型コロナウイルス感染拡大前と比較し、インターネットを使ったギャンブルの利用が増えた（「新たに始めた」、「する機会が増えた」の合計）との回答は、PGSI8点未満の者では3.6%であったのに対し、PGSI8点以上の者では19.9%であった。

（6）過去1年間で経験した宝くじの種類

○ 過去1年間で宝くじを購入した者の購入した宝くじの種類は、PGSI8点未満と8点以上の両群とも、ジャンボ宝くじ、ロト7・ロト6、スクラッチの順で多かった。ロト7、ロト6、ミニロト、ナンバーズ4、ナンバーズ3、ビンゴ5、着せかえクーちゃん、クイックワンについては、PGSI8点以上の者が、PGSI8点未満の者と比較して、統計的に有意に過去1年間にギャンブルを経験した者の割合が高かった【図表5】。

（7）ギャンブル等依存症対策の認知度

○ ギャンブル等依存症対策に関して、PGSI 8点以上の回答者の「知っている」との回答は、「パチンコ・パチスロの入店制限」は29.6%、「競馬・競輪・競艇・　オートレースの入場制限」は16.3%、「競馬・競輪・競艇・　オートレースのネット投票停止」は12.6%、「競馬・競輪・競艇・オートレースのネット投票の購入上限設定」は16.3%、「金融機関からの貸付制限」が19.3%であった。【図表6】

※1 PGSI（Problem Gambling Severity Index）：カナダのHarold Wynne博士, Jackie Ferris博士によって開発されたギャンブル問題の自記式スクリーニングテスト。一般住民を対象とした疫学調査で使用するために開発されたテストで，海外の多くのギャンブル問題に関する調査で用いられている。得点範囲は0点～27点で，本調査は合計8点以上の者を「ギャンブル等依存が疑われる者」とした。
※2 年齢調整：全人口における年齢構成と，本調査の回答者における年齢構成の差異の影響を取り除くため，令和5年10月1日現在人口を基準人口として補正。
※3 95%信頼区間：同じ調査を100回実施した場合，95回の頻度で，信頼区間内に真の値が含まれることを意味する推定値。
※4 その他には「ゲーム課金」が含まれる。ゲーム課金（ガチャ）をギャンブルとするかについては議論が残るところではあるが、今回はギャンブルの集計に含めた。

国民の娯楽と健康に関するアンケート：調査（A）主要な結果②

【図表１】「国民の娯楽と健康に関するアンケート」 概要

	令和5年度「国民の娯楽と健康に関するアンケート」					参考 令和2年度「娯楽と健康に関する調査」			
研究実施主体	令和5年度 依存症に関する調査事業研究 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センターが厚生労働省の補助を受けて実施 （研究代表者 松下幸生）					令和２年度 依存症に関する調査事業研究 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センターが 厚生労働省の補助を受けて実施（研究代表者 松下幸生）			
調査方法	自記式アンケート調査（紙回答・Web回答）					自記式アンケート調査（紙回答・Web回答）			
対象者の選択方法	全国の住民基本台帳より層化二段無作為抽出					全国の住民基本台帳より層化二段無作為抽出			
調査対象者数	18,000名					17,955名			
回答者数	9,291名（回答率 51.6%）					8,469名（回答率 47.2%）			
有効回答者数	8,898名（有効回答率 49.4%）					8,223名（有効回答率 45.8%）			
ギャンブル等依存が疑われる者（PGSI※1 8点以上、過去１年以内）		男性	女性	全体	人数※3	男性	女性	全体	人数※3
	割合※2 （95%信頼区間）	**2.8%** **（2.3～3.3%）**	**0.5%** **（0.3～0.7%）**	**1.7%** **（1.4～1.9%）**	**140名/8,812名**	**2.8%** **（2.3～3.4%）**	**0.4%** **（0.3～0.7%）**	**1.6%** **（1.4～1.9%）**	**122名/8,107名**

※1 令和5年度は「ギャンブル等依存が疑われる者」の推計に、PGSI（Problem Gambling Severity Index）を用いた。 令和2年度は、「ギャンブル等依存が疑われる者」の推計に、SOGS（South Oaks Gambling Screen）を用い、主要な結果を報告書＊にまとめた。 SOGSとは、アメリカのサウスオークス財団が開発した病的ギャンブラーを検出するための自記式スクリーニングテストであり、ギャンブル障害に関する国内外の疫学調査で数多く採用されているが、質問数が多いことなどから、令和5年度調査では採用しなかった。【図表1】では、令和2年度の報告書＊ 34頁に掲載した、PGSIによる「ギャンブル等依存が疑われる者」の推計値を掲載。 *松下幸生、新田千枝、 遠山朋海; 令和2年度 依存症に関する調査研究事業「ギャンブル障害およびギャンブル関連問題の実態調査」. 2021年.

※2 割合（%）と95%信頼区間は，年齢調整後の値である。

※3 人数の分母は「過去1年間にギャンブル経験あり」の者の中でPGSIに完答した者と、「過去1年間にギャンブル経験なし」および「生涯ギャンブル経験なし」の合計数を示す。分子はPGSI8点以上の実数。

国民の娯楽と健康に関するアンケート：調査（A）主要な結果③

【図表2】ギャンブル等依存が疑われる者（PGSI 8点以上の者）における過去1年間で最もお金を使ったギャンブルの種類

ギャンブル種	男性	女性	男女合計
パチンコ	46 (43.4%)	14 (60.9%)	60 (46.5%)
パチスロ	26 (24.5%)	4 (17.4%)	30 (23.3%)
競馬	12 (11.3%)	0 (0.0%)	12 (9.3%)
競輪	3 (2.8%)	1 (4.3%)	4 (3.1%)
競艇	6 (5.7%)	0 (0.0%)	6 (4.7%)
オートレース	1 (0.9%)	0 (0.0%)	1 (0.8%)
宝くじ（ロト・ナンバーズ等も含む）	4 (3.8%)	1 (4.3%)	5 (3.9%)
証券の信用取引、先物取引市場への投資、FX	7 (6.6%)	0 (0.0%)	7 (5.4%)
その他	1 (0.9%)	3 (13.0%)	4 (3.1%)
全体	106 (100%)	23 (100%)	129 (100%)

※男女ともに該当者がいないギャンブル種は表に記載せず、無回答（n ＝ 11）
※その他の内訳（男性：ゲーム課金（n=1），女性：ゲーム課金（n=2）、記載なし（n=1））
※ゲーム課金（ガチャ）をギャンブルとするかについては議論が残るところだが，今回はギャンブルの集計に含めた

【図表3】性別・年代ごとの「ギャンブル等依存が疑われる者」の割合 ※【 】は有効回答者数

	男性	女性	全体
18-19歳	0(0.0%)【78】	0(0.0%)【84】	0(0.0%)【162】
20-29歳	8(2.1%)【390】	1(0.2%)【562】	9(0.9%)【952】
30-39歳	21(3.7%)【564】	6(0.9%)【705】	27(2.1%)【1,269】
40-49歳	35(4.4%)【792】	5(0.6%)【897】	40(2.4%)【1,689】
50-59歳	20(2.2%)【903】	8(0.8%)【1,022】	28(1.5%)【1,925】
60-69歳	21(2.3%)【908】	3(0.3%)【902】	24(1.3%)【1,810】
70-74歳	10(1.9%)【519】	2(0.4%)【486】	12(1.2%)【1,005】
合計	115(2.8%)【4,154】	25(0.5%)【4,658】	140(1.6%*)【8812】

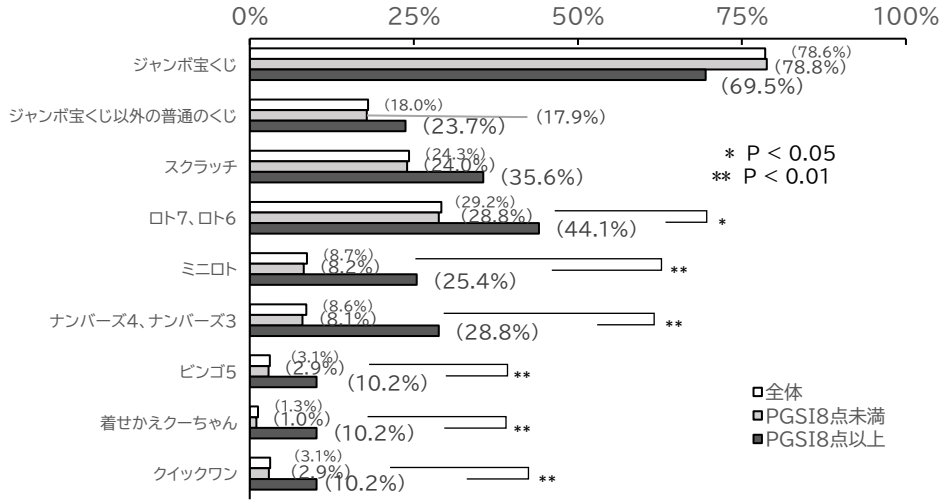
＊ 年齢調整前の%

【図表4】公営競技への投票・証券の信用取引等の購入手段（PGSI 8点以上/未満別・全体）

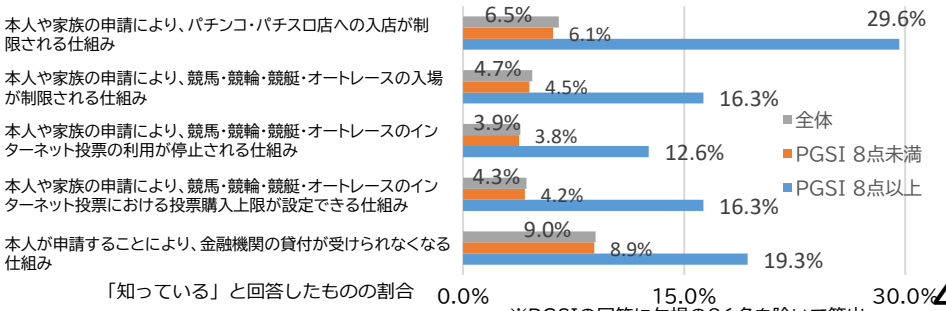
ギャンブルの種類	PGSI 得点	ギャンブル場/場外売り場	オンライン（インターネット）	ギャンブル場/場外とオンラインの両方	合計
競馬	8点未満	178(33.7%)	300(56.8%)	50(9.5%)	528
	8点以上	13(34.2%)	17(44.7%)	8(21.1%)	38
競輪	8点未満	21(32.8%)	40(62.5%)	3(4.7%)	64
	8点以上	5(27.8%)	10(55.6%)	3(16.7%)	18
競艇	8点未満	59(49.2%)	53(44.2%)	8(6.7%)	120
	8点以上	4(23.5%)	7(41.2%)	6(35.3%)	17
オートレース	8点未満	8(42.1%)	9(47.4%)	2(10.5%)	19
	8点以上	1(11.1%)	8(88.9%)	0(0.0%)	9
宝くじ（ロト・ナンバーズ等を含む）	8点未満	1,535(77.3%)	361(18.2%)	90(4.5%)	1,986
	8点以上	36(64.3%)	13(23.2%)	7(12.5%)	56
スポーツ振興くじ（toto、BITG、WINNER等）	8点未満	84(29.0%)	199(68.6%)	7(2.4%)	290
	8点以上	5(33.3%)	10(66.7%)	0(0.0%)	15
証券の信用取引、先物取引市場への投資、FX	8点未満	32(16.4%)	159(81.5%)	4(2.1%)	195
	8点以上	1(8.3%)	10(83.3%)	1(8.3%)	12
その他のギャンブル	8点未満	5(55.6%)	4(44.4%)	0(0.0%)	9
	8点以上	1(33.3%)	1(33.3%)	1(33.3%)	3

※ PGSI 回答不備などを集計から一部除外

【図表5】〈図1〉過去1年間で経験した宝くじの種類（PGSI8点以上/未満別・全体）



【図表6】ギャンブル等依存症対策の認知度



※PGSIの回答に欠損の86名を除いて算出

「依存の問題で相談機関を利用された方へのアンケート」：調査（Ｂ）主要な結果①

【有効回答の内訳】

○　当事者：288名（男性251名　女性32名　　性別未回答5名）
　　家族　：382名（男性73名　女性 302名　性別未回答7名）【図表７】

○　当事者の平均年齢：男性43.9歳（標準偏差11.8歳）　女性42.7歳（標準偏差16.5歳）
　　家族の平均年齢　：男性61.2歳（標準偏差11.7歳）　女性52.9歳（標準偏差12.1歳）

【主要な結果】

（１）　相談の原因となった依存の種類

○　当事者の相談の原因となった依存の種類※１はギャンブルの問題（64.9%）、アルコールの問題（17.0%）の順で多く、家族の相談の原因となった当事者の依存の種類では、ギャンブルの問題（58.1%）、アルコールの問題（25.1%）の順で多かった【図表８】。

※１ 相談の原因となった依存の種類については、当事者票、家族票ともに複数回答の項目として設定。割合（%）は有効回答数を母数として算出。

（２）　当事者のギャンブル行動の特徴※２

○　当事者の問題となっているギャンブルの種類（当事者回答）は、パチスロ、パチンコ、競馬の順で多かった。なお、オンラインカジノについては、7.5%が「当事者の問題となっているギャンブルの種類」として回答している。【図表９】。

○　ギャンブルの問題に気付いてから初めて病院や相談機関を利用するまでの期間は、平均2.9年であり、1年未満で相談に来たと回答した人が最も多かった（56.1%）【図表10】。

（３）　家族が回答した当事者のギャンブル問題行動※３

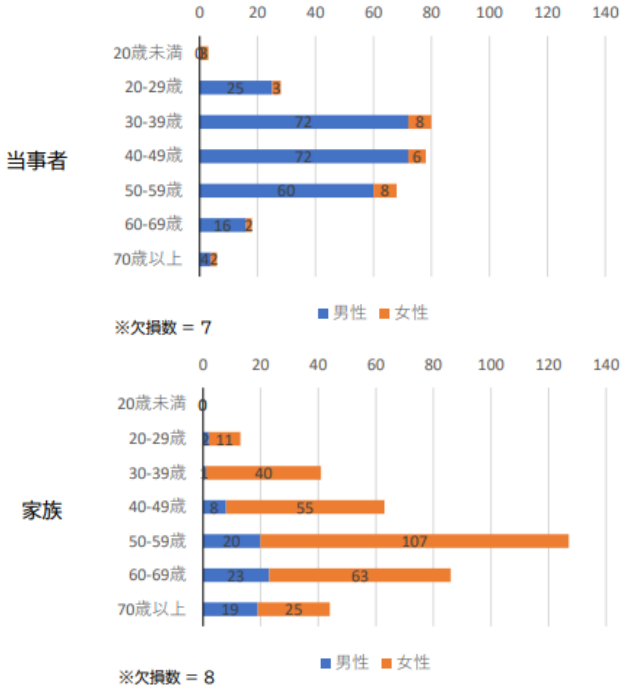
○　家族が回答した「当事者にとって問題となっているギャンブルの種類」は、パチンコ、パチスロ、競馬の順で多かった。なお、オンラインカジノについては、11.7%が家族が「当事者の問題となっているギャンブルの種類」として回答している。【図表９】

○　当事者のギャンブル問題に気付いてから、初めて病院や相談機関を利用するまでの期間は平均3.5年であり，1年未満で相談に来たと回答した人が最も多かった（52.4%）【図表10】。

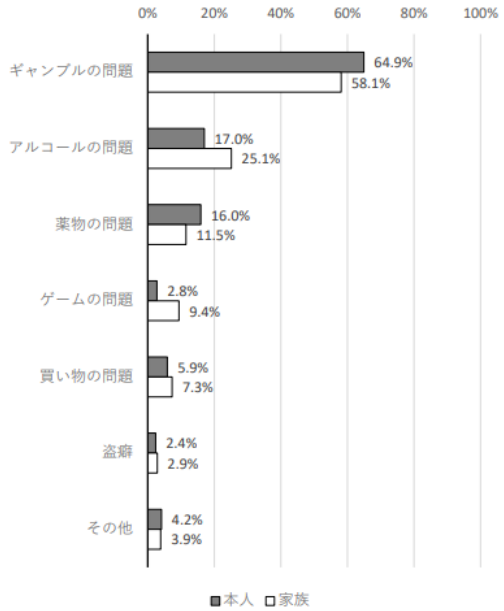
※2 ※3 相談の原因となった依存の種類について、「ギャンブル問題」を選択した者を対象に集計。

「依存の問題で相談機関を利用された方へのアンケート」：調査（Ｂ）主要な結果②

【図表７】有効回答数の内訳（性別、年齢別）

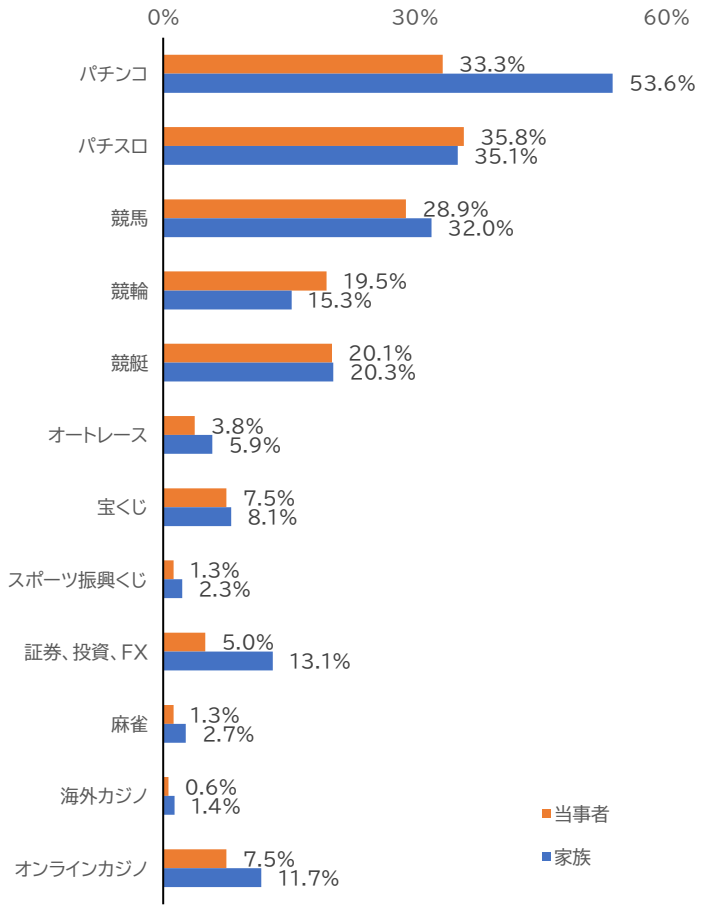


【図表８】有効回答数の内訳（性別、年齢別）



※本人の割合の分母:n=288
※家族の割合の分母:n=382
※本人のその他の内容:タバコ, ネット, 関係性依存, 性の問題
※家族のその他の内容:タバコ, ネット, 関係性依存, 性の問題, 摂食障害, オークション

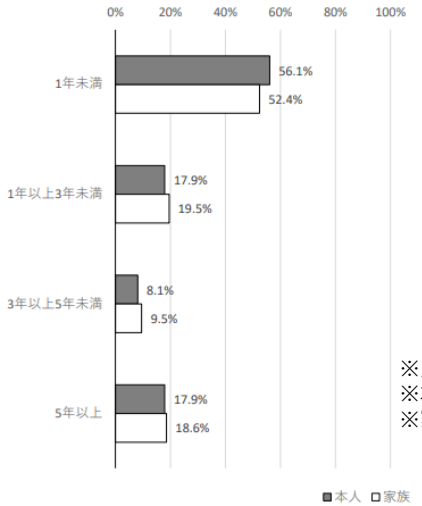
【図表９】問題となっているギャンブルの種類



※その他と回答 当事者 = 3名，家族 = 12名
※本人の割合の分母： n = 159
※家族の割合の分母： n = 222
※本人・家族ともに当事者の問題を「ギャンブルの問題」と回答した者の回答を集計対象としている。
※その上で，本人については過去1年でギャンブルを経験した者の回答のみ集計対象とした。

※　図表９「問題となっているギャンブルの種類」について、「パチンコ」と回答した「家族」の割合に誤りがあったため、令和６年８月30日に公表したものから修正。

【図表10】相談に来るまでの期間



※欠損数 当事者 = 14，家族 = 12
※本人の割合の分母： n =173
※家族の割合の分母：n=210

全体とのまとめと考察

【国民の娯楽と健康に関するアンケート：調査（A）】

- 本調査で用いたスクリーニングテストであるPGSIは、簡便にギャンブル問題を検出できるため、一般住民を対象とした疫学調査において世界的に用いられている。SOGSは、PGSIと同様にギャンブル障害に関する国内外の疫学調査で数多く採用されてきたが、近年の調査では使用されない傾向にある。SOGSはPGSIに比べて、借金について尋ねる質問が多く全体項目数が多いこと、偽陽性※1が多いなどの欠点が指摘されている。今回は全体の質問項目数も多く、調査対象者の負担軽減のため、SOGSをスクリーニングテストの項目として採用しなかった。

  ※　SOGSとPGSIでは、ギャンブル等依存の疑いの判定にかかる尺度が異なっており、その数字を単純に比較することはできない点に留意が必要。

- なお、本調査で用いたスクリーニングテストであるPGSIによる、ギャンブル等依存が疑われる者の推計は、あくまでも問題を有する可能性がある者を検出するものである。スクリーニングテストで検出された者が、実際にギャンブル障害の診断基準に該当するかどうかについては医師の診察および診断が必要である。したがって、スクリーニングテストによる数値の解釈は慎重に行うことが望ましい。
  PGSI８点以上でギャンブル等依存が疑われるのは、男性の2.8%（95%信頼区間：2.3～3.3%）、女性の0.5%(95%信頼区間：0.3～0.7%）、全体の1.7%(95%信頼区間：1.4～1.9%）であった。なお、令和2年度「ギャンブル障害およびギャンブル関連問題の実態調査」報告書（34ページ）におけるギャンブル等依存が疑われる者の割合は1.6%(95%信頼区間：1.4～1.9%)であり、95%信頼区間は同値となっている。そのため、令和2年度時点における推計値と、令和5年度の推計値との間に統計的に有意な差（統計的に意味のある違い）があるとは認められない。

- ギャンブル等依存が疑われる者のギャンブル行動として、過去1年に最もお金を使ったギャンブルの種類は全体（男女合計）で、パチンコ（46.5%）、パチスロ（23.3%）、競馬（9.3%）の順で多かった。

- 年代ごとの「ギャンブル等依存が疑われる者」の割合については40代が最も多く、次いで30代が多かった。

- 公営競技などでは、全体としてインターネットを使用している割合が高いことが窺えた。

- ロト7・ロト6、ミニロト、ナンバーズ4・ナンバーズ3、ビンゴ5、着せかえクーちゃん、クイックワンの経験者（過去1年間）の割合は、PGSI8点以上の者の方がPGSI8点未満の者の割合よりも統計的に有意に高く、これらの宝くじは、ギャンブル等依存症が疑われる者に比較的好まれやすいことが推測される。一方で、ジャンボ宝くじ、普通くじ、スクラッチでは、両者間に統計的に有意な差は確認されなかった。また、「選択可能性」（購入時に任意の番号等を選択する形態）、「結果の即時性」、「オンライン購入」のうち、最低２つが該当する宝くじは、すべてPGSI8点以上の者と、8点未満の者とで経験人数の割合に統計的に有意な差があったことから、一部の宝くじとギャンブル問題との間に一定の関連があることが考察される。

【依存の問題で相談機関を利用された方へのアンケート」：調査（B）】

- 公的な相談機関を利用したギャンブル等依存の問題を抱えている当事者およびその家族が、ギャンブル問題に気が付いてから初めて病院や相談機関を利用するまでの期間は、それぞれ平均2.9年、3.5年※2であった。

※１　SOGSは偽陽性が多いことから、PGSIによる割合よりもSOGSによるギャンブル等疑いの者の割合の方が高く出る傾向がある。
※２　令和2年度調査では、本項目については調査していないため比較はできない。